

短歌を味わう

死に近き母に添ひ寝のしんしんと

齋藤茂吉

遠田のかはず天に聞ゆる

母と二人でいるとき、元気なときには蛙の声なんか聞こえなかったのに、母が病気になると、静かになって、いつもは聞こえなかった蛙の音が、遠くの田んぼから聞こえてくる。「しんしんと」からは、静かということだけでなく、さみしい、かなしい気持ちなども分かる。

この一首は、第一句と第二句の間と、第三句と第四句の間に少し長い休止をおいて読むのが適切である。この場面の様子がよく感じられることであらう。

(近藤 葵)



観覧車回れよ回れ

栗木京子

想ひ出は君には一日我には一生

この一首は、第二句と第三句との間に、少し間をおいて読むのが良い。また第四句と第五句は、少しゆっくりと読むのが良い。

前、友達と観覧車に乗り、回っている間にいろんな楽しいことをした。

みんなには、今日の思い出になるけど、僕には一生の思い出になるだろう。

「思い出」を「想ひ出」と書いているのが印象的である。

(織田慶人)



短歌を味わう

ずぶ濡れのラグー奔るを見おろせり

塚本邦雄

未来にむけるものみな走る

この歌は、第四句と第五句を続けて読むとよい。未来に視野を向けている人は、皆、それに向かって走り、自分の未来に希望を持つ姿がこの歌に描写されている。

今の時代、先が不鮮明で、未来を悲観する人もいるが、自分の将来に向けて走り続けている人もいる。作者はそんな明るく前向きな姿を歌に現している。

未来というのは未知の世界だが、ためらわずに向かう様子がこの歌の印象である。



(武井日佳理)

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と

俵万智

答える人のいるあたたかさ

この一首では、三句目「寒いねと」の後に、少し長い休止をおいて読んでみよう。少し長い休止をおくことで、人のあたたかさがより伝わりやすくなる。

これは、どんな心を歌ったものであろうか。寒い日に、「寒いね」と話しかけると、相手も、「寒いね」と答えてくれる。これは、当たり前のことのように思えるが、それは、人の優しさ、あたたかさであるということである。寒い季節の短歌であるが、「あたたかさ」とあるのは、人の思いやりによって、心がほっと温まるということである。

日常生活で何気なく交わされている会話の中には、心のあたたかさがたくさん詰まっているんだということを教えてくれる。そんな短歌である。

(青谷有梨)

